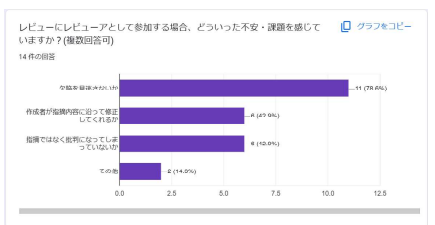
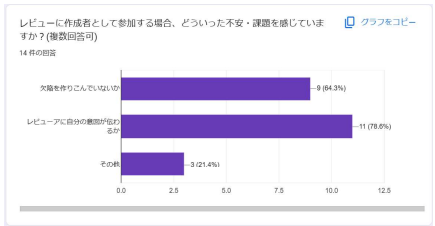
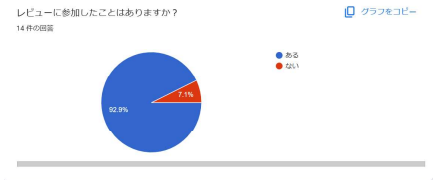
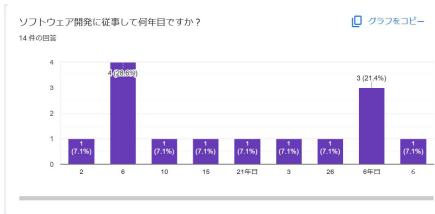


シート

1	アンケート(回答一覧)
2	アンケート(グラフ)
3	アラティブ(事例1)
4	アラティブ(事例2)

No	開発経緯	レビュー参加経験	作成者としての課題	作成者としての課題の理由	レビューアとしての課題	レビューアとしての課題の理由
1	6年目	ある	欠陥を作りこんでいないか その他	すべての運用パターンを網羅できているか不安になる	欠陥を見逃さないか その他	自身の経験だけでレビューできているものか不安になる
2	6年目	ある	レビューアに自分の意図が伝わるか	・説明やプレゼンのスキル不足による不安 ・レビューアによって真逆のことを言われたりすることがあるため、板挟みに苦しむ。また、その際に自分が意見を伝えるような機種のスキルが不足している。	欠陥を見逃さないか 指摘ではなく批判になってしまっていないか	・自身の経験が浅いこともあり、欠陥を見逃さないか ・的外れな指摘をして、ウザいと思われるか。または、混乱させてしまわないか。
3	15年目	ある	欠陥を作りこんでいないか レビューアに自分の意図が伝わるか	レビューアとレビューイの前提条件(知識・口頭やメールなどでコメント化されていない要件)がどこまで一致しているか。	欠陥を見逃さないか 作成者が指摘内容に沿って修正してくれるか	時間がなくリスクの高そうなどただを重点的に見るが、見逃しにつながらないかどうか。
4	21年目	ある	欠陥を作りこんでいないか レビューアに自分の意図が伝わるか	レビューイとして、レビューアから回答に困るような指摘がくるかもしれないため。	作成者が指摘内容に沿って修正してくれるか 指摘ではなく批判になってしまっていないか	せっかく指摘しても、採用してくれなかったのかそのままにするのかの結末は共有してほしいから。
5	6年目	ある	その他	自身の設計が最良の手段か、判断がついていないから	欠陥を見逃さないか 作成者が指摘内容に沿って修正してくれるか 指摘ではなく批判になってしまっていないか	レビューア/設計者職者としての経験が浅く、適切なレビューができていないから
6	6年目	ある	レビューアに自分の意図が伝わるか	レビューイとしてレビューアが指摘したコメントの意図をくみ取れるのか、コメントを踏まえて適切な修正が行えるか不安を感じる。	欠陥を見逃さないか	委託会社への開発を依頼しレビューする立場にある。レビュー対象ソフトの規模が多くレビューアとして適切に指摘ができるか不安を感じる。または委託先の方がソフトに対して詳しいケースもあり本質的なレビューとなっていない。
7	6年目	ある	レビューアに自分の意図が伝わるか	意図が伝わらず、必要な内容が取り消しになった経験があるため。	その他	一と逆の立場で、作成者の意図を正しく汲み取れるか不安に感じている。
8	6年目	ある	欠陥を作りこんでいないか レビューアに自分の意図が伝わるか	自分の気づいていない欠陥があるのではないかと常に不安に感じている。また、ほとんど見られずレビューAになる場面もありそういう意味でも欠陥の見逃しがあるのではないかと不安になる	欠陥を見逃さないか	作りこんだ機能以外にデグレが生じていないか常に不安である。また、上のようなデグレは仕様書から判断できず、コードレビューで見つけられないといけないためコードレビュー中に常にプレッシャーを感じる。また、見逃してしまった場合も「なぜ、こんなものを見逃したのか?」自分でも不思議なくらいにしようもないミスを見逃しており、レビュー時にそういうミスに気付くノウハウを知りたいところ
9	26年目	ある	欠陥を作りこんでいないか レビューアに自分の意図が伝わるか	どのように説明したら、与えられた時間内にレビューしてもらえるのかわからない。	欠陥を見逃さないか 作成者が指摘内容に沿って修正してくれるか 指摘ではなく批判になってしまっていないか	全てを説明してくれているか分からない。説明が無い内容はレビューできない。
10	10年目	ある	欠陥を作りこんでいないか レビューアに自分の意図が伝わるか	新しく担当するテーマだと、自身の設計・実装がテーマ担当者の意図通りか作業が後戻りしないかがわからず不安に感じる	作成者が指摘内容に沿って修正してくれるか	要求事項が曖昧な部分があるため、設計者にちゃんと伝わっているか不安に感じる。自身の中である程度、解を持っているがそれが伝わっているかが不明なため。
11	2年目	ある	欠陥を作りこんでいないか レビューアに自分の意図が伝わるか	質問にうまく答えられないと理解していないと思われそう。欠陥があると後ろめたく感じる。	欠陥を見逃さないか 指摘ではなく批判になってしまっていないか	欠陥を見逃すと後で手戻りが発生したり、市場に流出して損害を与える可能性がある。批判的になると相手の心理的安全性を損なう可能性があり、信頼関係が崩れると感ずる。
12	6年目	ある	欠陥を作りこんでいないか	機能単体の不具合であればまだ良いが、他の機能・システムに影響を及ぼし稼働が止まったりユーザに影響が出ること一番恐れるため。	欠陥を見逃さないか 作成者が指摘内容に沿って修正してくれるか	自分のレビューのスキルが伴っていないか、これで足りているかは不安に思う。ベテランの有識者に再度実施してもらおうほうが良いのではとも思うがそこまで工数も無いため現状で出来る限りミスが無いようにするしかない。
13	6年目	ある	レビューアに自分の意図が伝わるか その他	レビューアが黙って聞いているだけでリアクションがないため、分かってもらえていないか不安になる。	欠陥を見逃さないか 指摘ではなく批判になってしまっていないか	中身を全て知っているわけではないため、抜け漏れがないか不安になる。
14	3年目	ない	欠陥を作りこんでいないか レビューアに自分の意図が伝わるか	正式なソフトウェアレビューにまだ参加したことがないため予想になりますが、レビューでの指摘が多いと自分の作業や努力を否定されているように感じてしまいがちです。(本当はより良くするための行動であり、前向きなものはずですが、なかなか難しいです。)	欠陥を見逃さないか 指摘ではなく批判になってしまっていないか	自分の技術が未熟なため、欠陥を見逃さないか不安です。また、欠陥に対する指摘をすべき場面で、作成者自身に対する指摘をして批判と捉えられてしまわないか不安に感じます。
15	2年目	ある	欠陥を作りこんでいないか レビューアに自分の意図が伝わるか	知識が浅いため、考慮すべきポイントや影響範囲の抜け漏れがありそうだから。レビュー指摘の内容を理解して汲み取れるか不安。どこまで丁寧に図などを残すべきかわかっていないから(UMLを描くのに慣れていないので、予定よりも工数を使いすぎてしまう)。UMLを正しく理解して書いているか自信がない。	欠陥を見逃さないか 作成者が指摘内容に沿って修正してくれるか	仕様書に書いてあること以外の考慮すべき点を見つけて出すことが難しい。指摘箇所があっても指摘できないかもしれない(様々な観点で見れるほど知識、経験がない)。自分の知識や考え方に自信がない、相手が自分よりも有識者の場合、書いてあること全てが正しいという先入観を持ってしまいがちだから。作成者に懸念点や変更箇所が伝えきれず、思ったように修正されない可能性があるから。
16	4年目	ある	レビューアに自分の意図が伝わるか	自分の理解度とレビューアとの理解度が違うため	欠陥を見逃さないか その他	フォーマットによって読みやすさが変わるため時間がかかる



事例1

参加者として、自分の指摘が批判になってしまっていないか不安になる

ナラティブ化する前の情報

<状況>

欠陥に対する指摘をすべき場面で、作成者自身に対する指摘をして批判と捉えられてしまわないかと不安を抱えている

<レビュー時>

- 自分の知識不足から見当違いな指摘をしてしまい、時間を取ってしまったことに申し訳なくなった。
- 自分の言い方では相手を傷つけてしまうのではないかと、意見を出せなくなってしまふ。ベテランの人に言ってもらえばいいかと何もなくなってしまふ。

<対策・考え方>

レビューの品質を高めるためには、参加者全員の協力が必要である。

その中でも、参加者は指摘ではなく批判をしてしまうのは避けよう。

批判をすることで、レビューアの意欲が削がれてしまったり空気が悪くったりしてしまう。

ナラティブ

1章: レビューミスが処刑に繋がる世界

こうなったのは、いつかいつの日からだったか、生産性の無いレビューだらけだった開発現場に、大きな鉄槌が下されるという法律が作られてしまった。

その犠牲者が今日もまた一人、まさかあの人がという人物がサングラスをかけた屈強な黒服たちに連れ去られていく。

「バカな！ 勤続三十年の儘が何故罰を受けないといけないんだ！？」

今二人の黒服から両腕を羽交い絞めにされている彼は、とあるベテラン社員。彼はたった一度、レビューで欠陥を見逃しただけで拷問されようとしているのだ。

拷問の内容は、鞭打ち百回。常人にはとても耐えられない内容だ。しばらく痛みで悶えた後、業務に戻れる程度には加減される。けれども痛いのは誰だって嫌である。

「貴方が見当違いな指摘ばかりをしてレビューがいつも長引いているとの通報があった！」

「レビュー時の音声も録音してある。言い逃れは出来んぞ！」

「う、うわああああっ！」

屈強な黒服の力で連れていかれた彼は、抵抗も虚しく拷問部屋へと姿を消してしまふ。

「ま、またレビューの犠牲者が……」

「レビューって出来たらやりたくないよな……。ただでさえ指摘するのも、されるのも嫌なのにミスったら鞭打ちって……」

「新人の俺たちが参加した所で何ができて言うんだよ……？」

社員たちは皆、レビューが怖くてやりたくないという恐怖を抱えてしまっていた。

「何で、こんな事になっちゃったんだ……。」よりもよって俺の苦手なレビューで、ミスったら鞭打ちにあつた法律が決まったんだなんて！？」

そしてそんな現状を最も怖がっている男は、社外人三年目の武藤。彼はレビューというタスクに不安を多く抱えている三年目の社員だ。これまでレビューに参加してきたが、まだまだ異状でできていないとコンプレックスを抱えている。

果たして武藤はこの状況で生きていくことができるのか、結末やいかに。

2章: 批判は避けよう

ここは、レビューで欠陥を見逃してしまふと鞭打ち百回の刑になってしまう世界。武藤は罰を受けたくないと必死だった。

レビューアとして参加することになった武藤は、プロジェクターに映し出されている仕様書を真剣に見つめていた。

鞭打ちの対象となるのは、欠陥を見逃した人だけでなく、全く発言をしなかった人も含まれてしまふ。

そのため武藤は何としても欠陥を見つけ出し、あの罰を避けなければならない。疑問に感じた所やおかしいと思った事をなりふり構わずツッコミを入れていった。

「すみません、その条件って合ってるんですか？」

「あの、今の仕様部分がちよとわからなくて……」

「その漢字が間違っています！」

「ファンが適切じゃない……」

「ページ番号がズレて……」

「前髪長すぎ……」

「脇汗エグ……」

武藤からの連続のツッコミに後輩の男性社員、早瀬は眉間に皺を寄せながらも答えていく。

重箱の隅をつつように態度と質問も重ねていくと、とうとう限界が来たのか早瀬が突如会議室中に響くほどの大きなため息をついた。

「……武藤さん、あなたこの機能の担当じゃないですか？ さっきからねちこい事ばかり言っつて、そんなに私の事が嫌いなんですか？」

「あ、はい……すみません」

「ったく、僕のペースを乱されまくってこっちも迷惑してるんですよ……」

ふと我に返った武藤は、参加者全員がウンザリしておりとても険悪な空気がなつてしまつていふことによく気が付いた。武藤はこれ以上何も言わないようにした。

レビューは結局時間内に終わらなかつた。原因は武藤のツッコミが時間を食いつたためである。

加えて作成者である早瀬も懇切丁寧に解答していたのもあり、仕様書の半分程度しかレビューができなかつた。

残りは回覧レビューとなつたのだが、武藤を含めた全員が問題無しとOKを出した。

(ツッコミすぎで空気を悪くしてしまつたけど、OKになつたし良いんだよね？)

少々不安を抱えながらも、武藤は安心して他の業務へと気持ちを変えた。

しかしその翌朝、それが間違いだつたと知る事となる。

「はい、今日はレビュー無いから気が楽だ……ん？」

「お前が武藤だな、これより刑を執行する」

「は！？」

廊下についていた武藤の後ろには、屈強な黒服が長さメートルもある鞭を片手に仁王立ちしていた。

すぐに廊下から立って逃げようとするが、すぐに羽交い絞めにされてしまふ。

オフィスワーカーで運動不足の武藤が力で敵うはずもなく、執行部屋に連れていかれてしまふ。

オフィスの一角に設けられた執行部屋は、まるで牢獄のような空間だ。窓のないコンクリート張りの寒々とした部屋に武藤は強にされていた。

「待って！ 嫌だ！ そんなので叩かれたら死んじゃうって！」

「大丈夫だ、業務に支障が出ない程度に加減する」

「いやいやいや！ 鞭打ちが怖すぎて、年々退職者が増えまくってるじゃないか！ 支障だらけだろ！」

「もう諦めろ、罰から逃れる事は出来ないぞ」

「そんな……」

武蔵は必死に泣き叫ぶが、黒服は淡々としている。もう鞭打ちは遅げられないと悟った武蔵は、全身の力が抜けてしまう。そんな中、隣の部屋から激しい音が響いてきた。

ピシッ！　パシッ！
「ぐわああ！　……チクショウ！　武蔵さんの質問攻めが無けりやうまいったのにいいい……！」

「なんだ、早瀬の方はもう始めてたのか」
「……」

どうやら早瀬が先に鞭打ちを受けていたらしい。早瀬の叫び声を聞いて思い返してみると、悪いのは自分だった気がしてきた武蔵はずっりとした罪悪感を抱えた。

次は自分がある番なのだ悟った武蔵は、せめて叩かれる理由を聞いておこうと思った。

「……俺はあの時、どうすれば良かったんだ？」
「そうだな……まずは作成者とレビューアの関係を良好に保つ意識を持って。でなければ昨日のような早瀬との険悪な雰囲気を引き起こす事もなかっただろうな」
「確かに、あの時は俺が罰を避けるためにがむしやりに質問をしまくったのが悪かったのはわかってる」
「お前が感じていたプレッシャーは大きかったとは思いますが、それは相手も同じだ。参加者が全員で協力しあえなければ、良いレビューはほぼ不可能と言っても過言では無いぞ」

一つのプロジェクトで成果を挙げるとい工程は、一種の作品作りであるとも言える。
参加者全員で一つの作品を作り上げていく上で、作品に対する評価が欲しいものになったり、指摘を受けて自信を無くしてしまう可能性もある。

そんな中でやり遂げるためには、助け合いが不可欠なのだ。
そんな中で相手に批判ばかりをぶつける人がいたら、きっとその人は、空気を悪くして作成者の自信を奪う邪魔者となってしまおうだろう。

レビューアは作成者に対して指摘ではなく批判をしていないか、常に気に掛ける必要がある。

「俺の言葉は、批判になっていたんだな。……後で早瀬に謝らないと」
「早瀬の方は先に鞭打ちが済んでいる。相当お前を恨んでいるだろうが、頑張って許してもらう事だな」
「それは本当に難しそうだな……でも俺が原因だし、仕方ないか」
「嫌なことに向き合うのは苦しいことだ。やろうと思えるお前は立派だと思うぞ」
「あ、ありがとう」

黒服から思わぬ言葉ももらって戸惑う武蔵。しかし次の瞬間、黒服の表情が悪魔のような笑みに変わった。

「ま、いくら反省しても俺のお楽しみ……おっと、鞭打ちはするけどな」
「おい今お楽しみって言ったか！？」
「気のせい気のせい(笑)」
「いや今絶対……」
「はいいいかいめいぞー」

パシイイッ！

ぎやあああ……

こうして鞭打ちの罰が執行された。あまりの痛みにその日は早退した武蔵だったが、次の日早瀬に土下座とご飯を一回おごる事でどうにか許してもらえたそう。

3章: 夢オチ

もう何度も目も眩えきれないほど鞭打ちを受けてしまった武蔵。次はどうすればいいのかと考えている最中、自分が何処かもわからない白い空間にいることに気が付いた。まだ寝起きのように頭が回っていない所に、誰かが後ろから声をかけてきた。

「おい」
「黒服！？　俺はまだ何も……ってどこどこ！？」
「教えてやろう。さっきまでの世界は、お前がレビューを嫌すぎて生み出してしまった夢の世界だったのだ」
「なんじゃそりゃ！？」

そう、これまでの出来事は武蔵自身が生み出した怖い夢だったのである。レビューに対して感じている不安が膨らみすぎて、生々しく夢の中で状況が再現されていたのだ。

果敢ない真実に武蔵がびっくりと肩を落としていると、黒服が肩に手を置いて話を続ける。

「まあそんなに気を落とすな。お前はあの世界で様々な経験をしただろう？　少なからず得られたものがあつたんじゃないか？」
「確かに……なんか、変な度胸がついちやったよ。とにかく何か貢献してやる一、っていうか」
「レビューの場に能動的に取り組めるようになったのは良い事だな」

もしかすると、この夢はあらかじめ経験をしておくことで先の不安を無くすために現れたのかも知れない。黒服の目はサングラスで見えないが、どこか頼のような慈悲の目を向けているように見える。

「まあ本来なら一度のミスくらいで鞭打ちなんてありえないからな。そんなのコンプライアンス的に絶対無理だろう。……それよりも、全員が消極的で、ただ形だけのレビューが当たり前になる方が問題だ」
「……それは嫌だな。時間の無駄だし」
「誰も意欲が無いから欠陥も見逃してしまう。生産性は最悪だろう」

何も効果が無いレビューは嫌だってやりたくない。かといって下手に動いて失敗したくない。このような負の連鎖を断ち切るためには、何かしら行動を起こす心がけが必要なのである。

「皆がレビューを正しく行うことが出来れば、レビューが嫌だという意識も減らせるだろう。……ここまで体験したお前なら、きっとできるようになる。大丈夫だ」
「黒服……」
「さて、そろそろお別れの時間だ」
「あ、ああ！　ありがとう！」

白い空間の明るさが増していき、夢が終わるような感覚に包まれる。ようやく終わったのかと武蔵は安心感に身を委ねる。

「叩かれたくなったらまた呼んでくれよな！(笑)」
「それは絶対にお断りだ！」

感動もへったくれもない黒服との別れを終えて、黒服は姿を消した。

「……い、おい武蔵！」
「はっ！？」

同僚の声に起こされた武蔵は、机に突っ伏した状態から飛び起きた。

「もう休憩時間終わるぞ？」
「へ？　あ、ほんとは……」
「なんかうなされてたぞ？　大丈夫か？」

同僚二人の言葉を聞いて時計を見ると、昼休憩がそろそろ終わる時間を指していた。ふと周囲を見渡してみると、夢の中のような緊張感は薄っぺらな気がした。

(あれ、全部夢だったのか？)

「って次の予定仕様書レビューじゃないか！　頑張らないとまた鞭打ち百回にされちゃう！」
「お前は何を言ってるんだ」
「罪重すぎんだろ(笑)」
「そ、そうだよな！　やっぱりおかしいんだよな！？」
「本当にどんな夢見てたんだよ……」

武蔵はもう刑罰されることがないという事実で全身の力が抜けた。大きく息を吐きだした後、武蔵は次のレビューの準備を始めた。

「よし、欠陥を見逃さないように頑張るぞ！」
「え、お前そんなに熱心な奴だったか？」
「きっと疲れてるんだ、そっとしておいてやろう」
「いやお前も参加者だからな、一応参加する姿勢は特とうぜ」
「へいへい」
「りよーがい」

妙な夢のおかげか、武蔵の意識は少しだけ前向きになった。レビューに対して能動的に参加できるようになったのだ。
意見する事に抵抗があったり面倒に感じて動かなかった同僚たちも、武蔵の積極的な姿勢にちよとずつ感化されていた。

彼はきっと、これから益々の成長を遂げていくことだろう。ただ、そのきっかけが一つの夢であった事は誰も知らないのである。

事例2

作成者として 必要な修正が伝わらずに取り消された件の経緯

ナラティブ化する前の情報

<状況>

[設計時]

~~の値引き額(%)の算出をする処理を担当していた。

上の処理は非常に複雑であったため、フローチャートで処理をまとめていた。

ただ、複雑な故、3ページに上る長大なフローチャートになっていた。

[レビュー時] 対面でレビューを実施

•フローチャートの説明に家の定、時間がかかってしまい、最後の方は流して説明していった

•説明後、開発リーダー(60歳)から「この値引き処理は助長だと思うから、消しておいて」と断定口調でレビュー指摘を受け、指摘に従い直したが、実は必要な処理であった。

どうなったか

上流の工程からドロップしたので、当然、実装もされず、社内のリリース前の検証でNGとなった。

<心境>

•自分を信じて、指摘を鵜呑みにしなければよかった。

•レビュー時間がかかるなら、対面ではなく、その部分だけ回覧ですればよかった。

⇒回覧よりも対面の方が良い と思いこみ

•対面レビューは大変なので、正直やりきった感があった。なので、指摘に対しておや?っと思ったが、達成感からなのか指摘を鵜呑みにしてしまった。上位文章を見れば、指摘が間違いであると分かったのに....

<問題点と対策>

文書構成の問題

マインドとしては「鵜呑みにするな」

認知バイアスのせいで、作成者+レビューアで受け取り方がずれた。

「ここ、そこ、全部」とかあいまいなキーワードがレビュー指摘に存在していたら、間違っって伝わる可能性がある 一回覧だったら明確に

大量のフローチャートを一回で説明しようとしたことが問題。

冗長な処理=消して とレビューアは言いたかったわけではないのでは?

→受け取り手によって歪んで受け取った?

ナラティブ

<本編>

「クソッ！あの野郎詰めやがって」

とある繁華街の酒場にて、説明 下手男は荒れに荒れていた。

～回想～

とあるレビューの場にて…

「こちらのフローチャートですが、とても複雑な処理になっており、ここはこうで、そこはそうで、あそこはああで～」

下手男が作成した資料をもとに説明しているところ、年配の開発リーダーから指摘が入った。

「ちょっと待って、その値引き処理って必要？」

「え？はい…必要だと思いますが…」

「いやなんで必要かわかんし助長に見えるからいらないでしょ」

「じゃそこ消してね、もう時間も残り少ないのでこれで終わりで」

～回想終わり～

「あいつが言う通りにあそこの処理消したのに結局必要な処理だったからリリース前検証でNGになったじゃねえかよ」

「その対応に違われてたせてこんな時間になっちゃった…もう飲むしかない！」

「おい！酒はまだか！早くしねえか！」

そんな下手男に1人の黒服が近づいてくる。

「お客様…少々よろしいでしょうか？」

「ああん！？」

バキッ！ドゴッ！

「これに懲りたらおとなしくするんだな。次にこの辺りで見かけたらさらうぞ」

「ううっ…」

黒服の過剰な暴力によって意識を失った下手男が目を見ますと、信じられない光景が広がっていた。

「あれ…？さっきまで酒場にいたはずなんだが…」

「ん？これ例のレビューの場面じゃあ…なんでこの場面を上から見てるんだ？」

「いや違う…！確かにあの時のレビューの場面ではあるけど、なんか説明している内容が違うぞ…」

「よく見ると資料の中身も変わってる気が…」

「あ！！やっぱり例の値引き処理に指摘入った！！」

「え！？必要だという説明で引き下がったぞ？？」

自分が参加した時のレビューとは異なる結果へと向かっていく光景を見て、下手男は何が違うのかを考え始めた。

「なるほど…あのクソほど分岐が多いフローチャートについて、全てを説明しようせず、分割して話しているのか…」

「それで指摘に対してもしっかりと説明して回答する時間が飛んでいるのか」

「なんで値引き処理が必要なのかについての説明も、とてもロジカルでわかりやすい…」

「よく聞いてみるとことごとくそとく曖昧なワードが一切無いのもわかりやすい要因かもしれないな」

「どうやら…間違っていたのは俺の方だったようだな…」

「相手にとって伝わりやすい資料の構成なのか？説明なのか？という視点が俺には欠けていた…」

「こうして第三者の視点で見ているとよくわかる…」

すると、レビューの場で説明をしている方の下手男がこちらを見上げ話しかけてきた。

(ククク…理解したようだな相棒…！)

(この声は…！お前はいったい誰なんだ！？)

(見てわかるだろ？俺はおまえ自身に決まっているじゃないか)

(手本は見せてやった、俺ができることはおまえにもできるはずだ)

(まあ後はうまくやるんだな)

(…ああ！後は任せてくれ！)

下手男が目を見ますと、そこは病院のベッドの上だった。

1年間のリハビリの後、復帰した下手男を待っていたのは別プロジェクトにおけるレビューの機会だった。

意識を失っていた際に見た光景を参考に、別人のように生まれ変わった下手男は、開発リーダーからの指摘にも怯まずに回答し、滞りなくレビューを終えることができた。

なお、レビューがうまくいったことに気を良くした下手男はこの後、

打ち上げとしてあの酒場に向かってしまい、例の黒服と再会することになる。